報告

森林を未来世代に渡す前にすべきこと

高峰　博保

石川地域づくり協会でコーディネーターという立場でいろんな地域づくりに関わっています。また、石川の森づくり推進協会という社団法人の設立から10年以上お手伝いをさせていただきました。そういうこともあって、今回参加させていただいております。今日、3つのポイントでお話をさせていただきます。1つは地域づくりで、何を一番のテーマにしているかということ。簡潔に言うと、「持続可能な地域づくり」をここ数年皆さん方にご提案申し上げてきています。「持続可能な地域づくり」はどういうことを意味しているかと言うと、ひとつは主体の問題がございます。いろんな活動していただく上で重要なのは、次なる世代をちゃんと育成できるような運動になっているか、活動になっているかということがございます。個人の主体を育てていくということもあれば、今ですとNPO法人など、法人格を持った事業体を作ることによって持続する活動を目指す団体も増えています。二つ目は、事業そのものがいかに継続性のあるものになっていくかということ。もうひとつはお金の問題です。活動が続かなくなっていくひとつの要因として、お金が集まらない、運動資金が足りなくなっていくことから低調になっていく傾向があります。やはり自らお金を生み出せるような活動をしていく、ということが重要ではないか。そういうことで、持続可能な地域づくりというお話をずっとさせてきていただいています。それが地域づくりという観点でのお話です。

2番目に、森づくりにどうアプローチするかということがございます。地域づくりと同じようなことが言えるんですけども、ひとつは担い手をどういう風に継続的に育成していくかということがございます。今日はボランティア活動として森づくりに関わっていらっしゃる、里山に関わっていらっしゃる方が多いと思います。そういう運動が非常に重要であるということはもちろんです。一方で、仕事として森に関われる人を、どう

地域の中でたくさん見出していくかということが、もっともっと必要なんではないかなということを感じております。それは、私も10年以上森づくりに関わってきていますが、ボランティア活動で出来ることの限界ということを最近非常に感じております。日本の国土の7割弱を占める森林全体を保全していくことを考えますと、業として森に関わる人たちを作っていかないと、これは非常に難しい。自分たちで出来る範囲というのは限られているという認識でやっていかざるを得ないんじゃないか。森づくりも、担い手をいかに作っていくかが大きな課題です。

もうひとつは、事業、活動として、やっぱりどう発展性のある活動にしていくかという事があります。里山で展開されていることというのは、環境教育的な活動が多いと思います。一方で是非やっていただきたいと思っているのは、エコツーリズム的な事業です。これは、お金をいただける事業として展開することになります。エコツアーでいちばん進んでいるのは、北海道と沖縄です。もちろん信州とか東北方面でも、いろいろやりだしているグループが、グループや法人体がたくさん生まれてはいます。そういう人たちの事業は、かなり高い金額設定をして、少人数に対してちゃんとしたガイドがついて、森を楽しんでいただく、森歩きを楽しんでいただくというメニュー展開がされています。そういうところは、地域の若い人や都会からそういうことをやりたいという人たちを受け入れ、ひとつの事業として展開している。そのような活動はこれからもっともっと必要になる。そのような事業が育っていかないと、その地域に住める、そこに暮らしながらそういうことを出来るという人が増えていかない。ですから、石川県では能登とか白山麓で高齢化、過疎化が進んで、若い人がどんどんいなくなっている。そういう地域で森を保全していくためには、業として森に関われる、森をフィールドとしていろんなことが出来る人たちを作っていただく、そういうことを事業にしていただく、ということを進めていかないと、森は保全されない。先日も、能登で間伐体験をさせていただきました。なぜ間伐体験をあえてやっていただいたかというと、里山というとどうしても雑木林というイメージになるんですが、針葉樹林もちゃんと、枝打ち、間伐をしていただければ、混交林になるんですね。下層植生が育って、草も非常に増えます。多様な生態系が生まれるということを、三重県の速水林業さんが研究されたレポートを出されています。是非皆さん方にも、そういう森にも目を向けていただきたい。そういうところをフィールドにして、いろんなお仕事が出来るような状況を是非作っていただきた

いということを、今日は皆さん方にお願いしたかったのです。たとえば、ゴミを捨てにくるという問題も、必ず山の人から言われます。都会の人に来て欲しくないということを、山の方からこれまでもいろんな形で私たちも話を承ってきております。山に人が少なくなればなるほど街の人はゴミを捨てに行きやすいですね。ですから、山に人がちゃんとお仕事をされていて、日常的にそこに人がいるということが増えてくれば、そんなことも出来なくなるはずじゃないですか、という風に思っております。

先ほど申し上げましたエコツーリズム的なメニュー開発を若い大学生の皆さん方にも参加いただいて、それぞれの地域の森を活かして、街の人に楽しんでいただける、本当にお金を出して楽しんでいただけるようなメニューを作っていくということを是非やっていただきたい。それは最終的には、本当にそれが面白いと思っていただければ、いわゆる過疎地とか山村に移り住んでいただいて、そこでお仕事をしていただくということに繋がっていくんじゃないかなと思っております。和歌山県と三重県さんが最初に立ち上げた、緑の雇用事業というのがございます。和歌山のデータだけ伺ったことあるんですけれども、年間100人以上の人が山村に移り住まれて、林業とか、森をフィールドにしたいろんな活動を展開されています。何年間か継続的にそういうことをされていますけど、具体的に山村に人が行くこと、そこに定住するという人が増えてはじめて、森が保全されていく。

もうひとつ重要なのは何かと言いますと、人工林の保全をちゃんとしないと、下流域の皆さん方は多大なる影響を受けるということです。人工林が保全されていないが故に、ちょっと雨が降っただけで、大水が出る、洪水が起こる、土砂崩れが起こるということが全国で頻発しております。枝打ち、間伐をしっかりしませんと、下流の人たちは洪水に見舞われやすくなります。過去数年、隣の新潟で起こったり、福井で起こったりしてますよね。石川県は手取川が非常に広い川でなかなか水があふれないということで恵まれてはいると思いますが、それ以外の河川の場合は十分あり得る話じゃないかと思っております。そういうことを防ぐためには人工林をちゃんと保全する。その保全する資金をどう生み出すか。間伐した木を木材としてもっと生かす、バイオマスエネルギーだけでなく、新しい科学的な研究をしていただいて、物質的に生かせるようなことを是非大学の皆様方には研究していただきたい。これがいちばん持続可能な資源のはずなんです。それを放置しておいて、海外から材木を入れて家を作ってみても、それはおかしいんじ

ゃないですか。石川県の住宅業界でも県産材を使った家作りという話をしています。そういうことが全県民的な運動として広がることによって、県内の人工林もちゃんと保全されていって、非常にいい環境を次の世代に渡せるようになると確信しております。里山をひとつの入り口に、最終的にはそういうところまで是非問題意識を広げていっていただき、いろんな関わりをしていっていただければと思っております。どうもありがとうございました。